入学からすでに、9ヶ月。センター試験まであと、2年。

■入学からすでに9ヶ月たちました。あなたは、9ヶ月間で成長しましたか。苦手教科は克服できましたか。定期試験や模擬試験で間違えたところは、二度と間違えない自信はありますか。課題や部活動などが忙しいと言い訳して後回しにできていませんか。

昨年の3年生には、センター試験の自己採点後に志望校を変えた人が多くいました。志望校のランクを下げたにもかかわらず、合格出来なかった人もいました。3年生になれば自然と学力が身につくことなど、絶対にありません。高校の空気が学力を向上させているわけではありません。高校に在籍しているだけでは、学力は保証されません。どのような学校でも各個人が努力したかどうかで合格、不合格が決まるのです。中学校の時に、自分より学力が下だと思っていた友達が、大学入試であなたを逆転することだってあり得ます。日々の授業の内容を、その都度その都度、自分のものにしていかなければ、学力は確実に下がります。

1月14日(土)・15日(日)に大学入試センター試験が実施されました。センター試験は、15日(日)並びに16日(月)の新聞に掲載されました。また、河合塾や東進ハイスクールのホームページにも掲載されています。

大学入試センター試験まで丸2年です。1月の進研模試を起点として、本気に動き始めたかどうか。受験に関しては、努力賞はありません。合格できるか、不合格になるかのどちらかです。第一希望合格のために、自分自身の生活を見直す時ですよ。

2017年センター試験 英語(筆記) 東進ハイスクール 全体概観より抜粋

今年の総語数は約4300語で、ここ6年続けて4000語を超える出題となっている。第1問・第2問は、発音・文法・語法等の英語の基礎力を試す問題で、全体配点の29%が与えられている。第3問～第6問は全体配点の71%を占める読解問題で、短い対話文の空所補充完成やパラグラフの理解を問う基本問題から始まり、実際に英文に接する際に考えられる様々な状況を想定した内容把握を問う出題となっている。具体的には、議論の要点整理、図表を交えた英文読解、広告文からの情報収集、物語文や説明文の読解等である。長文の語数は、第4A(説明文)が約600語、第5問(物語文)が約650語、第6問(説明文)が約600語である。英語のパラグラフについての基本的な理解のうえに、英文のタイプに応じた読み方が求められた。

「執念あるものは可能性から発想する。執念なきものは困難から発想する」(松下幸之助)

高1が涙、道に散乱した紙拾い集め 鴻巣署が感謝状…見ないふり辛い

鴻巣署は4日、県道に散乱していた古紙を一人で回収した行田市在住、県立鴻巣高校1年の湯本里咲さん(16歳)に感謝状を贈った。見て見ぬふりをして通り過ぎる自分を受け入れられず、後先のことを考えずに一心不乱に集めた行動は、周囲の心を揺り動かした。

自転車で通学している湯本さんは昨年12月21日夕方、鴻巣市屈巢の県道を通りがかった際、新聞紙や折り込みチラシが半径約3メートルにかけて大量に散乱しているのを目の当たりにした。一度はそのまま通り過ぎたものの、「何もしていない自分に辛くなった」と戻って来た。当初は古紙を自転車の前かごに積んで自宅に持ち帰ろうとしたが、収まり切れない。約500メートル離れたコンビニエンスストアへ行き、ごみ袋を買って戻り、再び拾い集めた。現場は交通量の激しい通り。湯本さんは青信号になるたびにひたすら拾い続けた。午後5時20分ごろ、同署に「女子高生が落とした荷物を一人で拾っている。かわいそうだから助けてほしい」と連絡が入った。署員が駆け付けると、すでにごみ袋3袋分、計10キロの古紙が回収されていた。持ち帰り方法を考えていた矢先に署員が到着。安心した湯本さんの目からは涙が流れた。

高校ではバスケット部に所属している湯本さん。学校周辺のごみ拾いなど美化活動をしてから朝の練習に取り組んでおり、「学校でもやっているのだから当たり前と思って拾いました」と振り返った。市村知孝署長から感謝状を贈られ、湯本さんは「周りの事をもっと見られる一年にしたいです」とほほ笑んだ。

1月6日付『埼玉新聞』

■行動した方が良かったことは、積極的に行動しましょう。いくら成績が良くても、人を思いやる心がなければ人間としてはダメですよ。

自転車は危険

12月30日午前5時10分頃、東京都港区六本木の歩道で、練馬区南大泉、社会福祉士事務所勤務荒木創(41歳)さんが、坂道を下ってきた渋谷区上原、飲食店員の男性の自転車にはねられた。荒木さんは病院に搬送されたが、間もなく死亡した。警視庁麻布署は重過失致死容疑で男性から事情を聞いている。同署幹部によると、自転車はマウンテンバイクだった。男性は同署に対し、「点字ブロックの上を走り、がたがたするのに気を取られ、歩行者に気付くのが遅れた」と話しているという。

12月31日付『讀賣新聞』

■通学時の自転車の乗り方については、何度も生徒指導部から連絡がありました。あなたは、ルールを守って自転車に乗っていますか。油断はとても危険です。安全確認をしっかりとって通学してください。上記の事件は、自転車に乗っていた人が加害者になった事件です。死亡した方は、41歳の男性です。午前5時頃の事故ですが、暗いということでは夜も同じ状況です。被害者にも、加害者にもならないために、常に危険を予想して自転車に乗るようにしてください。

置かれた場所で咲きなさい

渡辺和子さんが12月30日になくなりました。9歳の時、2・26事件があり、目の前で父親が殺害される体験をしました。著書『置かれた場所で咲きなさい』はベストセラーになりました。

「置かれた場に不平不満を持ち、他人の出方で幸せになったり不幸せになったりしては、私は環境の奴隷でしかない。人間と生まれからには、そこで環境の主人となり自分の花を咲かせようと、決心することができました。それは「私が変わる」ことのよってのみ可能でした。」「どうしても咲けない時もあります。雨風が強い時、日照り続きで咲けない日、そんな時には無理に咲かなくてもいい。その代わりに、根を下へ下へと降ろして、根を張るのです。次に咲く花が、より大きく、美しいものとなるために。」

渡辺和子さんが亡くなりました

雪の朝、愛する父親が自分の目の前で凶弾に倒れる——。壮絶な体験は9歳の少女の胸にかくも深い傷を与えるものか。昨年暮れに89歳で亡くなったノートルダム清心学園理事長、渡辺和子さんの生涯を著書や記事でたどってしばし考え込んだ▼陸軍教育総監だった父渡辺錠太郎氏は昭和11(1936)年2月26日、自宅で青年将校らの銃弾を浴びた。和子さんは座卓のかけで難を逃れた。怒声、銃声、血の跡が恨みとともに胸の底に刻まれた。長じてカトリックの道に進むが、いくら修養を積んでも恨みは消えない▼意を決して、父をあやめた将校らの法要に参列したのは2・26事件の50年後。「私たちが先にお父上の墓参をすべきでした。あなたが先に参って下さるとは」。将校の弟が涙を流した。彼らも厳しい半世紀を送ったことを初めて知り、心の中で何かが溶けたという▼晩年まで過ごしたのは、岡山市にある学内の修道院。静穏な日々ばかりではなかった。30代で学長という大役を任せられ、管理職のストレスに悩んだ。50代で過労からうつ症状に陥り、60代では膠原病に苦しんだ▼80代で刊行した随筆『置かれた場所で咲きなさい』が共感を得たのは、父の悲劇を含め自らのたどった暗い谷を率直につづったからだろう▼「つらかったことを肥やしにして花を咲かせます」「でも咲けない日はあります。そんな日は静かに根を下へ下へおろします」。いくつもの輝く言葉を残し、80年前の雪の朝に別れた父のもとへ旅立った。

2017年1月4日『朝日新聞』朝刊「天声人語」

「」